

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災発生から6年3ヶ月が経過しましたが、今なお忘れずに様々な形で支援をしてくださっている方々がおられます。今回は、5月に仙台で行われた日本カトリック女性団体連盟の総会の様子と、京都教区カトリック高野教会で行われたチャリティコンサートの様子をご紹介します。また、被災地での活動として、会場を移して初めて行われた八木山オリーブの会の活動、チーム平・堂根の夏祭りイベント、カリタス石巻ベースの遠足の様子をご紹介します。2011年4月30日付で第1号が発行されたこの東日本大震災復興・支援活動ニュースレターが、次号で第100号を迎えます。

日カ連総会 仙台で開催

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

日本のカトリックの女性たちの活動団体である「日本カトリック女性団体連盟（日カ連）」では、毎年、総会を開催し、1年間の活動を分かち合い、さらに女性カトリック信者として、どう生きていくことを神がお望みなのかを研修しています。今年度は5月16日~18日、仙台市で第43回総会が開かれました。テーマは「『絆』神の愛を共に生きる」で、東日本大震災発生直後から支援してきた団体として、6年経った被災地を訪問したいという会員の希望に応じて実現したものです。参加者は、会場の都合上、心ならずも人数制限をしなければならず、11教区から11団体60名と現地の会員100名が参加した会議になりました。

1日目の年次総会では、会長・深堀邦枝さん、副会長・阿部正子さんとジョンソン伸子さんが、2017年~2020年度の新役員として承認されました。各団体の活動報告では、被災地支援活動などの発表がなされ、各団体の活動が被災者と支援者の絆を強めるものとなっていることを実感し、参加者の心を打ちました。

2日目は、大型バス2台に分乗して東松島市と石巻市の被災地を巡礼。まず、カリタス石巻ベースが毎週火曜日に「お茶っこ」でお訪ねしている「ひびき仮設住宅」を訪れました。住民の方から、実際に仮設住宅を見せていただき、どんなに狭い場所で、どんなに話し声や物音などで、隣近所に気を使って生活しているか、という話を伺い、実感しました。

次に、新旧の「野蒜（のびる）駅」を見学しました。津波に襲われた旧野蒜駅では、ホームの天井から下げられていた駅名板に残された津波の高さに驚き、震災復興伝承館になった旧駅舎では、語り部さんの語るDVDを見、「地震が来て、津波警報があったときは、必ず高台に逃げる。銀行通帳や、荷物に心を奪われていたらだめ」という体験に基づいた忠告が心にしみました。

そこから石巻へ移動し、昼食。津波被害を受けた市内の中心街で、50人以上がともに食事ができる唯一のレストランというところで食事をしました。そこに、津波被災を受け、工場も事務所も流されたという山形屋商店の主人夫妻が駆けつけてこられました。長期熟成吟醸みそで有名な山形屋さんは、原材料と製品がすべて流され、熟成中のみそ醤油もすべて廃棄。あまりの惨状に廃業を考えていたところに、カリタス石巻ベースのボランティアたちが、泥かき、洗浄などの支援活動を続け、被災を受けなかった同業者に工場の一部を借り、生産を続けることになりました。完成した吟醸みそ、醤油などの商品を、日カ連は傘下の各団体を通して全国のカトリック信者に販売するシステムを作り、協力しています。ぜひ、皆様に感謝を申し上げたいと来られ、バスが発車するまで、手をふって見送っていただきました。

街がすべて消失した門脇（かどのわき）地区を巡礼し、「がんばろう石巻」と大書した看板前の慰霊場所で花束をささげ、祈りました。

そこから、日和山公園に向かう途中、石巻ベースの脇を通り、石巻教会へ。聖堂で、會津隆司神父から、震災後、困窮していたフィリピンの女性たちを支援し続けている話を伺い、現在フィリピン人たちの

リーダーをしているアメリカ佐々木さんが全国の日カ連の皆さまへの感謝を述べたビデオメッセージを見て、仙台に向かいました。

夕方、元寺小路教会に到着し、信徒ホールで、10のグループに分かれ、夕食を囲みながら、この日の被災地巡礼の分かち合いが活発におこなわれました。何度かボランティアとしてベースで活動して下さっていた人は、「ずいぶん、様子が変わってきていますね。でも、復興とは言えません。まだまだ」と言い、被災地は初めての人は「聞いて分かっていたつもりだけど、見ると全然違いますね」と話しておられました。「この分かち合いがあったのが、とてもよかった」と話す人もおられました。

最終日は、平賀徹夫司教が、今年度の日カ連テーマ「『絆』神の愛を共に生きる」を基調講演。閉会ミサは、13人の司教・司祭による派遣ミサで、開催地の仙塩地区連合婦人会会長・佐藤栄美子さんから、次回来年度の開催地である新潟女性の会会長・橘依理子さんにペナントが手渡され、閉会しました。



元寺小路教会の廊下では、東日本大震災関連のパネル展示が行われました

100年前の日本家屋で

八木山オリーブの会 野田 和雄

八木山オリーブの会は、津波被災者の傾聴を続けています。現在は、仮設集会所からカトリック亶理教会へ場を移しました。しかし、教会の老朽化対策と聖堂の拡張のために、工事を行うことになり、その期間、教会から徒歩で5分のマリアの宣教者フランシスコ修道会(FMM)の亶理修道院で集いを継続することになりました。亶理修道院は地元で貢献しておられるS家のはなれ(建て増し)に間借りされています。その大家さんのお好意で100年前に建てられた母屋を使わせていただくことになりました。一度は入ってみたいと思うような、由緒ある日本家屋です。5月24日の八木山オリーブの会参加者の皆さんは、これをとても喜ばれ「昔の家を思い出して落ち着く」「今日は来てよかった」と好評でした。昔、近辺に食事するところもなかったのが、会社関係の方との懇談、接待で使用されたと聞きました。八木山オリーブの会の30人程度の集いでは十分な広さの和室が二つあります。

シャクナゲや雲龍梅の花にアゲハ蝶が舞う庭を眺めての暮は、さながら日本棋院の対決場のようです。「自分たちのヘボ碁が、会場だけは名人戦のようだ」と男性群の中には自笑する人もいます。

女性群も、初めての会場に慣れてくるといつものおしゃべりが始まります。今日は、粘土細工で小物入れを作る予定ですが、皆さん手こずっています。「ちょっと手伝って!」いつもは2階に分かれている男性たちが今日は同じ続きの和室にいたので、気楽に声をかけられます。ニコ神父様は、粘土細工のメンバーに紛れ込むと、どこにいるのかわかりません。お茶やお菓子のサービスもフラットな会場では、楽ちんです。

これまで八木山オリーブの会は、旧館仮設住宅→公共ゾーン第3仮設住宅→カトリック亘理教会→FMM 修道院と旅するように場所を変え、その度に新しい人が加わり、被災者の人々がついて来てくれました。傾聴ボランティアが教会協働の歩みに代わり、地元教会がボランティアを引き継ぐという理想的な自立支援へと進んできました。



同じ続きの和室で、碁や粘土細工などを楽しむ参加者たち

オリーブの会の亘理教会側メンバーは、聖堂拡張工事に入り、ボランティアの本気度がアップしています。これからのオリーブの会を支えていくのは、私たちだ!という強い意志を感じます。そして、八木山→亘理への移行をスムーズにするためのグループが、各々仕事の引き継ぎを始めています。企画・会計・広報・連絡の打ち合わせを重ねる度に亘理の自立が目に見える形になっていきます。グループ毎の引き継ぎが順調に進めば、八木山→亘理へのソフトランディングもうまくいきそうです。

オリーブの会の歩み、教会の拡張工事、移転先の恵み、自立支援には、多くの人々の祈りが支えとなっているのを感じます。八木山オリーブの会への祈りとご支援に、深く感謝します。

※亘理教会の改修工事は、9月に完成予定で、10月には落成記念も煮会を企画しています。



みんなで一緒に美味しいごはんを食べ、歌を歌っていつものように楽しい時間を過ごしました

平・堂根 夏祭りを終えて

いわき教会 チーム平・堂根 佐々木 三代子

梅雨入りも間近の6月4日、いわき教会 チーム平・堂根は、いわき市災害公営住宅「内郷砂子田団地」で、久しぶりの大規模イベント「夏祭り」を企画し、開催いたしました。

東日本大震災発生直後から改修工事で中断するまでの三年間、私たちは、みなし仮設として、市内最大の1,600人もの津波被災者が入居した内郷雇用促進住宅団地内にあるミニ体育館さながらの集会所で、月2回のお茶会を開き、さらに年に二度のイベントを通して、住宅の皆様との交流を続けてまいりました。

被災から3年を経て、各々の出身地近くに災害公営住宅ができ、津波被災者の方々が、仮設住宅などから元の地域に戻られるようになりましたが、その多くが年配者でした。さびしい暮らしと見受けられ、自治会長の方からの要請があり、チーム平・堂根は、海沿いの薄磯に建てられた災害公営住宅にもサロンを開くことになり、現在では40名の方たちが、毎月のお茶会を楽しみに待ってくださっています。

一方、14階建ての内郷雇用促進住宅は、市が災害公営住宅として使用するために買い取り、全住民が退去後、2015年4月から全館の大規模改修工事が始まりました。その期間、サロン活動は一旦中断となりましたが、災害公営住宅「内郷砂子田団地」と名称も新たに、2015年10月に西棟、2016年3月末に東棟の入居が開始されたことから、6月にサロン活動を再開しました。

今回、内郷砂子田団地に入居された被災者の方たちの生活も落ち着かれたことから、初の試みとして、平・堂根サロンに集う2つの団地の合同イベントを考えました。それは、災害公営住宅「内郷砂子田団地」と災害公営住宅「薄磯団地」に住む被災者同士が、もっと親しくなって、助け合うようになってほしい、という願いからです。

会場は、敷地が広い内郷砂子田団地をお借りすることにし、事前の草刈り、整地を内郷砂子田団地に住む方々(砂子田チーム)にお願いしました。薄磯団地の方々(薄磯チーム)には、薄磯から内郷砂子田まで、車で30分ほど距離があることから、約40名の参加者には、区長さんのバスやその他の車に分乗し、来ていただくことにしました。



料理は大好評で、あっという間になくなってしまいました

イベントで提供するお料理は、薄磯チームにはお得意の豚汁を、砂子田チームには、ホットドッグとご飯を担当していただきました。各食事とも、300~400食の無料提供です。前日から、薄磯、砂子田両チームの担当者18名と平・堂根の9名は、いわき教会信徒ホールに集合して下ごしらえにかかりました。

イベント当日は、各チームに色別のバンダナを準備し、男女とも薄磯は青、砂子田はオレンジ、平・堂根は赤のバンダナを首に巻いて、全員がいっそう張り切り、生き生きと働きました。

当日のメニューには、焼きそば(磐梯ダルク)、ベトナム風肉団子ビーフンスープとベトナム風ぜんざい(川口ベトナム共同体、愛徳姉妹会)、おいなりさんと和菓子(仙台白百合学園シスターズ)、鎌倉の鳩サブレ(湘南白百合学園シスターズ)——特にこの日は、カトリック教会の典礼暦では「聖霊降臨」の大祝日に当たっているため、この日にちなんで鳩サブレを朝5時に修道院を出発し、提供していただきました。そして、ドリンクコーナーは平・堂根が担当しました。この中でも人気コーナーはコーヒーですが、このおいしいコーヒーを入れるのは、83歳の大先輩です。



様々な出し物があり、皆さん笑顔で楽しませていました

11時の開会挨拶の後、打ち出し太鼓の音とともに、法被(はっぴ)、鉢巻き姿もりりしい、いわき市を中心に和太鼓演奏活動をしている「一打の会」17名の和太鼓演奏は圧巻で、集まっていた人々全員をその場に釘付けにしたほどでした。

ベトナムの青年たち44名も笑顔いっぱい、一生懸命に働きました。「おいしい、おいしい」と大好評の肉団子ビーフンスープやぜんざいの振る舞いに忙しい傍ら、優雅なアオザイ姿で民族舞踊や歌で皆を楽しませていただきました。

イベントを終え、一同はいわき教会に戻り、イエズス・マリアの御心会の本間管区長様の主司式、東京のメリノール会のロー神父様により「感謝のミサ」をささげました。

ボランティア一同の各々が見ている先には、被災者の方々がおられ、これだけの力を結集してくださったのだと、神様のご配慮に深く感謝するとともに感慨深いものがありました。



たくさんの方のご協力で、大成功のイベントとなりました！

顔が見える支援を！～高野教会チャリティコンサート～

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子

東日本大震災から丸1年経った2012年3月11日、仙台教区サポートセンター(以下、サポートセンター)では、京都教区の高野教会とテレビ電話をつないでいました。高野教会ではこの日、震災発生時刻に合わせて、復興支援のためのチャリティコンサートが開かれており、その中で被災地の現況を報告していただけないか、ということでお声掛けいただいたのです。高野教会信徒の小原義雄さんがカリタスペースへボランティアに来てくださった時に、サポートセンターのスタッフと出会ったことがきっかけでした。

それから5年経った今年3月、サポートセンターに再び小原さんからご連絡がありました。「チャリティコンサートをあの後もずっと続けています。集まった献金をカリタスジャパンへ送るという形で私たちの支援を続けているけれど、直接、東北の方々の顔を見て、支援がしたいのです」ということで、5月に行うチャリティコンサートで、再びテレビ電話でお話することになりました。小原さんと、同じく高野教会信徒の伊藤正也さんが、当日お話しする内容の調整と会場のセッティングのために、事前に何度もご連絡をくださいました。

当日、チャリティコンサートには高野教会の聖歌隊と、普段、聖堂で練習をしているアンサンブル・ルーチェという弦楽合奏グループが出演し、第一部と第二部の間でサポートセンターとの掛け合いをするという流れでした。小原さんと伊藤さんは聖歌隊のメンバーとして出演をしながら、掛け合いの段取りもなさっており、大活躍のご様子でした。



今年のチャリティコンサートの様子

掛け合いの中で、サポートセンターからは、仮設住宅から災害公営住宅へ住民の移動が進んでいる中、新たな問題が出てきている被災地の現状と、今後の支援として、被災地への関心を持ち続けてお祈りを続けていただきたいこと、被災地の物産を買って応援していただきたいこと、直接、被災地に足を運んでいただきたいことをお伝えしました。私たちが見ているパソコンの画面には、既におなじみになった小原さんだけが映っているので、あまり緊張もせずにお話していたのですが、後日送っていただいた写真を見ると、画面の向こうの高野教会の聖堂ではたくさんのお客様が聞いてくださったことが分かり(コンサートの最中なので当たり前ですが)、ビックリしました。

高野教会がある京都と、仙台は800km以上離れています。ボランティアに来るとすれば大変なことです。震災から6年経った今も、ご自分たちにできることを、と想いを届けてくださったことが大変うれしく、画面越しではありますが、直接お話をさせていただけたのは、とてもありがたいことでした。



京都と仙台をスカイプでつなぎ、顔を見ながらやりとりをしました

高野教会では、年に2回、春と秋にバザーを行っており、次回以降、東北の物産販売を企画して下さるそうです。これから先も、お付き合いがずっと続いていく予感がします。高野教会の皆さん、これからもどうぞよろしく願いいたします。



なんとかあやめ園の駐車場に到着し、少し雨足が弱まったので、傘をさしたり、合羽をきて、あやめ園へ徒歩で向かいました。

あやめ園は、ホンアヤメが見頃を終え、メインであるハナショウブは、まだ咲いていないところが多かったのですが、一部満開のところがあり、そこで皆さんアヤメを写真に収めたり、記念撮影をして、アヤメを楽しむことができました。



その後、晴れていればあやめ園近くの加瀬沼公園で、原っぱにシートを敷いてみんなで一緒にお弁当を食べる予定でしたが、次の目的地である道の駅おおさとで、軒下のベンチや車内でおしゃべりしながら楽しくお弁当を食べ、食後は地場産品などゆっくり買い物をして、それぞれに楽しみました。また、この頃には、空も晴れてきたので、あやめ園で撮れなかった記念の集合写真を撮りました。

帰りの車中では、男性参加者Kさんがお楽しみを考えて来てくださっており、一人ずつくじを引き、くじに書かれた番号と同じ番号が書かれた少し重みのある包みをいただきました。包み紙を開いてみると、そこには、Kさんご自身が河原に石を拾いに行き、それに絵や文字を描いて仕上げた心のこもった素敵な作品が入っていました。1つ1つ書かれている言葉やイラストが異なり、受け取った皆さんは、そこに書かれた言葉を披露したり、隣の席の人と見せ合ったり、大変盛り上がりました。一人の参加者からは、「家に帰ったら、石の裏側に今日の日付を記入して、遠足記念にしましょう!」との提案もありました。サプライズで皆さんを喜ばせてくださったKさん、素敵な思い出となるプレゼントをありがとうございました。



その後、またみんなで歌謡曲や民謡を、時に歌詞に大笑いしながら笑顔で歌い、最後は歌の上手な方のリードで「石巻港節」を歌いながらベース到着となりました。「次回は、紅葉だね!」と、もう次の遠足を期待する声もあがっていました。

今回、天気は不安定でしたが、皆さんの心は明るく晴れやかとなり、喜んで帰ってくださったので、大成功の遠足だったと思います。後日、参加者の皆さんから「遠足、楽しかった!」「普段あまり話さない方との会話や、皆で楽しく歌って、本当に嬉しかった」との感想が、ベースに寄せられました。様々な準備や下見をし、楽しい遠足で参加者の皆さんを笑顔にしてくださった石巻ベーススタッフの皆さん、大変お疲れ様でした。次回の紅葉遠足は、お天気に恵まれ、皆さんとまた素敵な思い出ができますように…。



新緑のアヤメ巡り ～天気は雨でも心は晴れやか～
 仙台教区サポートセンター 鈴木 玉恵

石巻ベースには、ベースが企画するイベントを今か今かと待ち望んでくださるオープンスペース利用者さんが、たくさんいます。昨年は、6月にベースの車2台に分乗し、16名で南三陸町、田東山（たつがねさん）へツツジを見に行きましたが、今年は、より多くの方と違った場所に行ってみようと、6月2日に定員28名乗りのマイクロバスを借りて、多賀城跡あやめ園へアヤメを見に行く遠足が計画されました。

遠足前日から雨が降り続き、当日朝には、石巻駅近くの道路が冠水したり、ベース近くのマンホールが何度か浮き上がるほどの大雨となり、無事に遠足に出発できるかと大変心配になりました。しかし、受付開始の9時頃から雨足が少しずつ弱まり、出発の10時近くには雨もあがり、青空が見えてきました。

この日の参加者は、男性2名、女性20名、石巻ベーススタッフ3名、サポセンスタッフ1名の合計26名で、バスは、ほぼ満員。今日のスケジュールが説明された後、時刻通りにベースを出発すると、早速、車中では、隣の席の人との楽しい会話がそれぞれに始まりました。その後、一人の方が歌詞カードを用意して持ってきてくださったので、それを見ながら皆で手を叩いての大合唱となりました。



途中、堤防工事の様子や仮設住宅、復興住宅が車窓から見えました。無機質な外の景色とは対称的に、バスの中は賑やかな声や笑顔が満ちて、皆さん楽しそうに過ごされていますが、参加されている方の中には、震災の傷が未だ癒えない人もいることから、そのような方にとって、遠足がたくさんの人と笑って歌って気分転換できる楽しい時間になるといいなあと感じました。



堤防工事の場所や未だ残る仮設住宅が見られました

休憩を取った後、一路、あやめ園を目指していくと、遠くに怪しげな雲が見えてきました。その雲が近づいてくると、雨が降り始め、あと10分ほどであやめ園に到着という時には、車のワイパーをフル回転させなければ前が見えないほどの大雨となってしまいました。

ニュースレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、sdsckoho@gmail.comまでメールをお送りください。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただければ幸いです。